

# 外部評価報告書

令和元年7月

静岡大学大学院  
総合科学技術研究科

## 目 次

|                    |       |    |
|--------------------|-------|----|
| I まえがき             | ..... | 1  |
| II 外部評価委員会実施要領     | ..... | 3  |
| III 外部評価委員会記録      | ..... | 4  |
| IV 外部評価委員会質疑応答・講評  | ..... | 6  |
| V 外部評価結果調査票まとめ     | ..... | 9  |
| VI あとがき            | ..... | 19 |
| 資料 1 外部評価委員会説明スライド | ..... | 20 |

## 静岡大学大学院総合科学技術研究科外部評価委員会

(令和元年 6 月 3 日)



外部評価委員（奥左側から遠藤委員、新田委員、鎌形委員長、勝山委員）

委員長 鎌形洋一（国立研究開発法人産業技術総合研究所生命工学領域領域長補佐）  
委員 勝山博子（常葉大学短期大学部特任准教授）  
委員 新田明彦（静岡県農林技術研究所所長）  
委員 遠藤正和（静岡ガス株式会社代表取締役専務執行役員）

学内出席者（手前左側から金原評価実施委員長（平成 30 年度）、森田農学専攻長、川田工学専攻長、田中理学専攻長、近藤研究科長、土屋評価実施委員長（令和元年度））



近藤研究科長による挨拶



質疑応答の様子（手前は各専攻からの陪席者）

## I まえがき

静岡大学は平成 27 年度（2015 年度）に理工系修士課程の改組を行い、それまでの情報学研究科、理学研究科、工学研究科、農学研究科の 4 研究科 15 専攻を廃止・統合し、新たに総合科学技術研究科を設置しました。総合科学技術研究科は以前の 4 研究科に対応する 4 専攻（情報学専攻、理学専攻、工学専攻、農学専攻）16 コースで構成されています。これにより、地理的には静岡キャンパスと浜松キャンパスにまたがるかたちを取ってはいますが、従来の研究科や専攻の枠を超えた分野横断的な教育プログラムの提供が可能となる教育体制が実現しました。また、博士課程との接続という点では、創造科学技術大学院及び光医工学研究科光医工学共同専攻（静岡大学・浜松医科大学共同教育課程）に接続するかたちとなっています。

本研究科では、「研究科共通科目」や副専攻・副コース制度の導入による基礎科学と応用科学の教育上の連携や、特色ある分野融合教育プログラムを通じた、より広い視野での「俯瞰する能力」の育成を目指しています。これに加え、英語のみによる学位取得を通じた留学生の受け入れ拡大及びこれに伴う英語科目や英語対応科目の拡充により、学生の「国際化対応能力」の育成を目指しています。これらにより、グローバル化や ICT の進展を含め大きく変動する社会に対応できる修士課程レベルでの高度職業人材を社会に送り出すとともに、「博士進学支援科目」を導入し、博士キャリア人材の育成に貢献しています。

本研究科の各専攻が前回の外部評価を実施した平成 25 年度（2013 年度）は、本研究科の設置以前であったため、総合科学技術研究科としての自己評価及び外部評価は今回が初めてとなります。この間、本研究科にとって最も大きな出来事は言うまでもなく研究科の設置それ自体でした。研究科設置以降の大きなトピックスとしては、英語のみによる学位取得を可能とするアジアブリッジプログラム（ABP）を含む英語コースの導入及び英語コース導入に伴う英語科目・英語対応科目の拡充、さらには学位プログラムに加えて様々な教育プログラムが導入されたことなどが挙げられます。

平成 25 年度（2013 年度）国立大学改革強化推進補助金事業として本学の「全学的な教育改革・組織改革によるグローバル人材育成機能の強化－ターゲット・アジア人材育成拠点の構築－」が採択されたことを受け、グローバル企画推進室（現国際連携推進機構）の設置、静岡大学グローバル人材育成アジアブリッジプログラム特定基金の設立、インターアカデミア・アジアの創設等に始まり、平成 27 年度（2015 年度）10 月よりアジアからの留学生を対象として ABP がスタートし、本研究科においても ABP 留学生の受け入れが開始されました。ABP 対象国以外の留学生についても ABP と同様に英語のみによる学位取得を可能とし、ABP と非 ABP をあわせて英語コースとして英語のみで学位取得が可能なカリキュラムを提供しています。

英語コースカリキュラムの実施と同時に、日本人学生に対しても英語による専門科目の開講が拡大されました。平成 29 年度（2017 年度）のデータでは、これら英語科目・英語対

応科目は研究科共通科目を含め 240 科目が開講されており、多数の日本人学生もこれらの授業を受講しています。また、各研究室での留学生の受け入れが増えたことに伴い、日本人学生も日頃から留学生と接する機会が増加し、研究科の国際化にとって大きな貢献があったものと思われます。

学位取得のためのカリキュラムに加え、本研究科では「放射科学教育プログラム」「山岳科学教育プログラム」「産業イノベーション人材育成プログラム」「光医工学教育プログラム」を実施しています。「放射科学教育プログラム」は理学研究科で実施されていたものを理学専攻で継承したものであり、理学部附属放射科学教育研究推進センターが中心となって開講しており、放射線取扱主任者試験で高い合格率を達成しています。「山岳科学教育プログラム」は、山岳地域を取り巻く環境問題の解決や山岳生態系の持続的管理などに対応できる人材育成を目指すもので、本研究科農学専攻、筑波大学大学院生命環境科学研究科、信州大学大学院総合理工学研究科、及び山梨大学大学院医工農学総合教育部修士課程生命環境学専攻との連携・協力のもとに開設されました。「産業イノベーション人材育成プログラム」は、もの・ことづくりに長けた人材の育成と地域企業との強い連携を目指し、情報学専攻・工学専攻が共同で開講しています。「光医工学教育プログラム」は情報学専攻・工学専攻が共同で開講する、光医工学共同専攻への接続プログラムです。このように、学位取得のためのカリキュラムに加え、多種・多様な教育プログラムを提供することで、学生の幅広いニーズに答えるとともに、「俯瞰する能力」の育成に取り組んでいます。

外部評価の実施にあたっては、大学教育と理工系の研究に造詣の深い鎌形洋一氏（国立研究開発法人産業技術総合研究所生命工学領域領域長補佐）、静岡県の農業政策に精通していらっしゃる新田明彦氏（静岡県経済産業部理事、静岡県農林技術研究所長）、高等学校の教育に長年携わっていらっしゃった勝山博子氏（常葉大学短期大学部特任准教授）、地域企業からの視点で評価をお願いした遠藤正和氏（静岡ガス株式会社代表取締役専務執行役員）の4名の皆様に外部評価委員をお引き受けいただき、外部評価委員長は互選により鎌形洋一氏に務めていただきました。この間、多くの時間と労力を割いて外部評価を行っていただいた委員の皆様に、あらためて厚く御礼申し上げます。委員の皆様から頂いた数多くの貴重なご意見・ご助言を踏まえ、総合科学技術研究科の教職員一同、一層の努力をしてまいる所存です。今後とも、ご忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いです。

令和元年7月

静岡大学大学院総合科学技術研究科長

近藤 真

## Ⅱ 外部評価委員会実施要領

### 1. 外部評価の目的

学外の有識者に研究科評価委員を委嘱し、静岡大学大学院総合科学技術研究科の教育、研究、社会連携、国際交流及び組織について、評価及び将来への提言を受け、本研究科の諸活動の改善、活性化に役立てるものとする。

### 2. 外部評価の実施方法

- (1) 自己評価書、参考資料及び外部評価結果調査票を事前に外部評価委員に送付し、事前調査を受ける。
- (2) 外部評価委員会を開催し、組織の概要・自己評価結果の説明と質疑応答を行う。
- (3) 外部評価委員会から、委員会開催当日に、事前調査及び当日調査の結果に基づき講評を受ける。
- (4) 外部評価委員から、事前調査及び当日調査の結果に基づき、後日、外部評価結果調査票の回答を受け取る
- (5) 外部評価結果を報告書にまとめて公表する。

### 3. 外部評価の日程

|              |                                 |
|--------------|---------------------------------|
| 平成 31 年 4 月  | 外部評価委員の推薦及び委嘱                   |
| 4 月中旬        | 自己評価書の作成                        |
| 4 月中旬        | 自己評価書、参考資料及び外部評価結果調査票を外部評価委員に送付 |
| 令和元年 6 月 3 日 | 外部評価委員会開催                       |
| 6 月 14 日     | 外部評価委員から外部評価結果調査票の提出            |
| 6 月末         | 外部評価報告書のとりまとめ                   |
| 7 月          | 外部評価報告書の公表                      |

### Ⅲ 外部評価委員会記録

#### 2019年度 静岡大学大学院総合科学技術研究科外部評価委員会

##### 1. 日 程

日 時：令和元年6月3日(月) 午前9時30分～12時

場 所：浜松キャンパス S-Port 3階 大会議室

出席者：別紙名簿のとおり

|        |                                      |
|--------|--------------------------------------|
| 外部評価委員 | 4名                                   |
| 大学側    | 6名(研究科長, 専攻長, 2018年度, 2019年度自己評価委員長) |
| 陪席者    | 10名程度                                |

司会進行： 川田工学専攻長

|             |  |
|-------------|--|
| 9:10        | 大学側関係者集合 S-Port 3階 大会議室                  |
| 9:25        | 外部評価委員 入室<br>控室(S-Port 3階南会議室) から大会議室へ移動 |
| 9:30-9:35   | 研究科長挨拶                                   |
| 9:35-9:40   | 大学側出席者紹介(近藤研究科長)                         |
| 9:40-9:50   | 外部評価委員自己紹介<br>委員長の選出                     |
| 9:50-10:30  | 自己評価の説明(近藤研究科長)                          |
| 10:30-11:10 | 質疑応答                                     |
| 11:10-11:20 | 休憩                                       |
| 11:20-11:40 | 外部評価委員のみの委員会<br>会場：S-Port 3階 南会議室        |
| 11:40-12:00 | 講評<br>会場：S-Port 3階 大会議室                  |



## 2. 出席予定者名簿

### 外部評価委員

|       |                               |
|-------|-------------------------------|
| 鎌形 洋一 | 国立研究開発法人産業技術総合研究所生命工学領域 領域長補佐 |
| 勝山 博子 | 常葉大学短期大学部日本語日本文学科 特任准教授       |
| 新田 明彦 | 静岡県農林技術研究所 所長                 |
| 遠藤 正和 | 静岡ガス株式会社 代表取締役専務執行役員          |

### 大学側出席者

|       |               |
|-------|---------------|
| 近藤 真  | 研究科長 情報学専攻長   |
| 田中 直樹 | 副研究科長 理学専攻長   |
| 川田 善正 | 副研究科長 工学専攻長   |
| 森田 明雄 | 副研究科長 農学専攻長   |
| 金原 和秀 | 2018年度評価実施委員長 |
| 土屋 麻人 | 2019年度評価実施委員長 |

### 陪席者

|         |                    |
|---------|--------------------|
| 小西 達裕   | 情報学専攻 副専攻長         |
| 笹原 恵    | 情報学専攻 2018年度自己評価委員 |
| 北村 晃寿   | 理学専攻 副専攻長          |
| 小林 健二   | 理学専攻 2018年度自己評価委員  |
| 喜多 隆介   | 工学専攻 副専攻長          |
| (金原 和秀) | 工学専攻 2018年度評価実施委員長 |
| 鳥山 優    | 農学専攻 副専攻長          |
| 平井 浩文   | 農学専攻 2018年度自己評価委員  |

### 事務局

|        |                     |
|--------|---------------------|
| 田中 晃人  | 浜松キャンパス事務部長         |
| 西山 卓男  | 浜松総務課 課長            |
| 久保田 政雄 | 浜松総務課 副課長 (企画総務/統合) |
| 山田 猛   | 浜松総務課 副課長 (情報/工学)   |
| 尾形 嘉則  | 浜松総務課 情報学部総務係 係長    |

#### IV 外部評価委員会質疑応答・講評

近藤研究科長による総合科学技術研究科の自己評価書及びスライドでの説明に対して、質疑応答及び講評が行われた。その要約を以下に示す。

##### <質疑応答>

【鎌形委員長】総合科学技術研究科は大きなバーチャル組織のようだが、情報の共有はあるのか？理想と実態のギャップはあるのか？

【近藤研究科長】文部科学省の大きくくり化の方針を受けて大学院を再編した。静岡と浜松の二つのキャンパスにまたがるためバーチャル化している。目的としては、俯瞰する能力の養成で、それは一定以上の意味を持つ。副専攻の制度を設けている。他専攻の講義履修が容易になった。一方、意思決定の階層が一つ増えたため、会議の回数が増えたが、それは代議員会で行っている。

【鎌形委員長】複合領域に関する学生アンケートがなかった。語学は大学入学から少しずつ劣化していくが、その改善方法は？また、学生アンケートの結果に違和感があった。

【勝山委員】未来に向かってどう進むのか？静岡と浜松に分かれることはどう考えるのか？

【近藤研究科長】2021年に法人統合、大学再編が計画されている。2022年度入学からである。大学院も2022年度から再編するのかが検討中である。静岡、浜松という異なる大学の共同の研究科は、制度上問題がある。

【鎌形委員長】統合は難しいのでは？財務面でもどうか？

【近藤研究科長】今後18歳人口が減少し、魅力ある大学を目指す必要がある。地方国立大学として、地域にある大学としても特色を出す必要がある。静岡は東京に、浜松は名古屋に近いため、地理的な利便性に乏しい。財務面でも厳しいことは認識している。

【新田委員】研究科は4つが統合しているが、例えば農業で言うと、情報化と機械化が進んでいる。それらは魅力展開であるが、実際はどのように取り組んでいるのか？

【近藤研究科長】東西キャンパスの研究交流会も開催している。個々の教員の交流は従来から行われているが、今後は研究科としての支援の必要性も感じている。

【鎌形委員長】「農業－情報の融合」など、はっきりした目標を掲げる必要性は？

【近藤研究科長】情報学専攻の峰野教員は、具体的にトマト農家の支援を行うなど、実質的に進行している。

【鎌形委員長】教育の質の向上に関して、スキルを上げる取り組みは具体的に行っているのか？

【近藤研究科長】FD活動の中で、学生のアンケートによるレーダーチャートの作成を行っている。それにより、自分の現状を認識し、少しずつチャートが外に向かっていく。また、FD講演会や、授業参観を行っていて、他の教員の講義を実際に見て参考にする活動も行っている。

【鎌形委員長】授業参観は難しいのでは？講義に対するインセンティブはあるのか？

【川田工学専攻長】委員会で参観を決めており、学科会議でも報告している。昇格の時に学生アンケートを参考にしている。新人教員に対する研究室運営のレクチャーも行っている。

【森田農学専攻長】修士論文の評価項目・内容を公表し、学生と教員の間での標準化を行うなど、学生にもわかる評価を行っている。

【遠藤委員】研究科として修了認定に係る人数は非常に多い気がする。

【近藤研究科長】各専攻で修了認定に関するチェックを行い、研究科の教授会では最終的な確認のみである。

【鎌形委員長】他大学から静岡大学の研究科を受けるとき、魅力的な内容か？大学院生の確保は？他大学への受験は？

【近藤研究科長】大学院の定員が、充足したりしなかったりを繰り返している。情報学部は定員200名を240名に増員する予定なので、今後は定員を充足するものと見込んでいく。また、内部進学が圧倒的に多いのが現状である。修士課程修了後の博士課程進学に関しては、創造科学技術大学院として別組織である。博士課程に進学する留学生や社会人は内部進学が少ないので、現在行っているABPの留学生が増加すれば、内部進学も増加すると見込んでいる。浜松医科大学との総合大学院に関しては、進学につながるものと期待している。

【勝山委員】国際化に関して、ABPの留学生は日本人学生への影響はあるか？

【近藤研究科長】ABPの留学生が増えるにつれて、研究室で留学生と日本人学生が話す場面が増えている。また、ABPの留学生を支援するチューター制度も設けている。今後は、外国人とのコミュニケーションが特別でないと感じられるキャンパスを目指したい。

## ＜講 評＞

【鎌形委員長】送付いただいた自己評価報告書には、自己評価の評点はないが、その上で外部評価を行うのか？また、説明がなかった基準に関しては評価委員が評価することによるしいか？

【近藤研究科長】自己評価報告書に自己評点は出さないものとなっている。平成 27 年に研究科発足後、融合して研究を行うことを指向している。

【鎌形委員長】他専攻の学生が講義を受けたり、研究を行うことは大きく評価できる。それらは、静岡大学のプレゼンスを上げることにもつながる。研究に関しては、研究費は十分獲得しているように思われる。論文数が漸減しているように見られ、向上に関するリアクションが必要である。学生に関しては、国際性、語学、リーダーシップに若干問題があり、それらを改善する教育を明示し、方向性を明らかにする必要がある。教員の負担も考慮しながら、どうしたらよいか、ポジティブな戦略を練る必要がある。しかし、全体的には今後に期待すると評価できる。

【勝山委員】高校を運営していた立場から言うと、静岡県内にいる学生にとっては、静岡大学は進学したい大学である。静岡大学に入れば、十分教育・研究ができるということを継続して欲しい。

【新田委員】4 専攻統合のメリットに関しては、専攻が連携した新しい分野が形成できれば、魅力のあるものができるかと期待する。

【遠藤委員】自己評価報告書に関しては、基準を満たしているという判断の根拠や、他大学との違いが分かる相対的な記述がないので、評価がしづらい。地元企業の経営に携わるものとしては、相対的な基準として静岡大学を評価したい。

以上

## V. 外部評価結果調査票まとめ

外部評価委員（A～Dの4名、順不同）より、自己評価書に基づく事前の検討、大学での説明・質疑応答による外部評価委員会および事後の検討を経て提出していただいた外部評価結果調査票における評価点および評価コメントをまとめて以下に示す。

### 【外部評価結果調査票における評価点のまとめ】

各基準の評価は次の1～4段階である。

4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。

3：概ね達成している。概ね適切・良好である。

2：改善が必要である。

1：抜本的な改善が必要である。

| 評価項目             | 外部評価委員 |      |      |      | 平均評価点 |
|------------------|--------|------|------|------|-------|
|                  | A      | B    | C    | D    |       |
| 基準1:組織の目的        | 3      | 4    | 4    | 4    | 3.75  |
| 基準2:教育研究組織構成     | 3      | 4    | 4    | 4    | 3.75  |
| 基準3:教員及び教員支援者等   | 3      | 4    | 3    | 3    | 3.25  |
| 基準4:学生の受入        | 3      | 4    | 4    | 4    | 3.75  |
| 基準5:教育内容及び方法     | 3      | 4    | 4    | 3    | 3.50  |
| 基準6:学習効果         | 2      | 2    | 4    | 4    | 3.00  |
| 基準7:施設・設備及び学生支援  | 3      | 4    | 3    | 3    | 3.25  |
| 基準8:内部質保証システム    | 3      | 3    | 4    | 4    | 3.50  |
| 基準9:財務基盤及び管理運営   | 3      | 4    | 3    | 3    | 3.25  |
| 基準10:教育情報等の公開    | 3      | 4    | 4    | 4    | 3.75  |
| 基準11:研究活動の状況及び成果 | 3      | 4    | 4    | 4    | 3.75  |
| 基準12:地域貢献活動の状況   | 3      | 4    | 3    | 4    | 3.50  |
| 基準13:国際化の状況      | 2      | 3    | 4    | 3    | 3.00  |
| 全体評価の平均点         | 2.85   | 3.69 | 3.69 | 3.62 | 3.46  |

## 静岡大学大学院総合科学技術研究科 外部評価結果調査票

自己評価報告書の内容及び外部評価委員会での調査・確認内容等に基づき、以下の各基準について、「評価」と「コメント」をお願い致します。

コメント欄には、「優れた点」や「更なる向上が期待される点」、「改善を要する点」を中心にご記入願います。

なお、以下の基準の内容は、基本的に「自己評価結果報告書」に記載されている各基準に沿ったものとなっております。

各基準の評価は1～4段階で数字に○印を付してください。

- 4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。  
 3：概ね達成している。概ね適切・良好である。  
 2：改善が必要である。  
 1：抜本的な改善が必要である。

### 【基準1】組織の目的について

研究科の目的（使命、教育研究活動を展開する上での基本的な方針、達成しようとしている基本的な成果等）が明確に定められており、その内容が学校教育法に規定されている、大学一般に求められる目的に適合するものであるか。

委員 A：研究科の目的は極めて明確に定められており問題ない。

委員 B：地域社会への貢献を、学力（知財）を持った人材の供給により達成する、という理念を掲げて推進しており、研究科という組織が有効に機能していると考えます。

委員 C：目的については、総合科学技術研究科規則等で定められており、概ね適合している。

委員 D：静岡大学大学院総合科学技術研究科規則に研究科の目的が明確に定められ、中期計画及び3ポリシーとの整合性も取られている。理工系大学院の大きくくり化により、より広い視野を持った理工系人材の育成が期待できる。

### 【基準2】教育研究組織構成について

教育研究に係る基本的な組織構成（学科、専攻、その他の組織の実施体制）が、研究科の目的に照らして適切なものであるか。

教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能しているか。

委員 A：教育研究に係る組織構成・運営体制とも適切である。

委員 B：教育を施すための運営体制とその体制が監督する機関が設置されており、一定の評価を行いながら運営が行われていることが確認できました。ただし、教員が本来の業務以外の大学運営などに多くの時間をとられていないかという危惧を抱きました。

委員 C：情報学（1コース）、理学（5コース）、工学（6コース）、農学（4コース）と専攻によって異なるが、それぞれ教育目的に沿ったコースが設置されている。

|  |
|--|
| 専攻会議や代議員会、企画運営会議、教務委員会、教育質保障委員会等が設置され、教育活動及び内容等の重要事項が審議されている。                                  |
| 委員 D：平成27年度の大学院改組により、4専攻16コースからなる新たな研究科を設置することによって、これまでの研究科や専攻の枠を越えた分野横断的な組織構成が整備され、適切に機能している。 |

### 【基準3】教員及び教育支援者等について

教育活動を展開するために必要な教員が適切に配置されているか。

教員の採用及び昇格等に当たって、明確な基準が定められ、適切に運用されているか。また、教員の教育及び研究活動等に関する評価が継続的に実施され、教員の資質が適切に維持されているか。

教育活動を展開するために必要な教育支援者の配置や教育補助者の活用が適切に行われているか。

|   |
|---|
| 委員 A：上記の要件を満たしている。  |
| 委員 B：教員の人数と学生数のバランスはとれていると思われます。ただし、教員のダイバーシティという側面から考えると、男女比や学外からの異動者の比率など今後検討すべきテーマがあると感じました。<br>各教員の静岡大学での在職年数などのデータがあると、教員の流動性が把握できるのではないかと思います。<br>また、事務職員数も増員の要望があるように見受けられました。 |
| 委員 C：必要な職員数は概ね確保されているものと思われ、年齢構成も配慮しながら採用を行っている。評価も組織的に行われている。<br>女性や外国人の採用や教育支援者の配置については引き続き努力する必要があると考える。   |
| 委員 D：各専攻の教育目的に沿った適切な教員配置が行われ、教育・研究活動の活性化が推進されている。ただし、教員に占める女性・外国人・若手教員の比率については、専攻によってはまだ不十分などところもあるため、今後の改善を期待したい。  |

### 【基準4】学生の受入について

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されているか。

実入学者数が入学定員と比較して適正な数となっているか。

|  |
|--|
| 委員 A：入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められている。実入学者数が適正な数となっている。  |
| 委員 B：学生の入試選考の可否にあたっては、一定の基準が設けられており、学生のレベルの維持がなされていると判断いたしました。また、選抜方法も公正に行われていると確認できます。<br>定員数に対して入学者数も適正範囲内であると思われますが、今後はさらに、学外からの優秀な学生を呼び込む施策も課題かもしれません。 |

委員 C：アドミッション・ポリシーを定め、学生の受入を行っている。定員管理も年度で変動はあるものの概ね充足されている。ただし、コースにより入学者に格差がみられるので、充足率が低いコースは、学生のニーズを踏まえつつ、改善が必要であると思われる。

委員 D：各専攻共にアドミッション・ポリシーが明確に定められており、多様な入試方法での学生の受け入れが行われている点が評価できる。特に ABP によるアジア留学生の増加は、学内の国際化推進だけでなく、日本人学生のグローバル化に対する意識向上への効果も期待できるのではないかと。

## 【基準5】教育内容及び方法について

### ②（大学院課程）

教育課程方針が、学位授与方針と整合的であるか。

教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であるか。

教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等（研究・論文指導を含む。）が整備されているか。

学位授与方針が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、修了認定が適切に実施され、有効なものになっているか。

学位授与方針に則して、適切な履修指導、支援が行われているか。

教育課程方針に則して、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか。

委員 A：教育内容及び方法については適切に定められ実施されている。

委員 B：各専攻ともに、学位を取得するための方向、方針などは明確になっていました。また、授業形態においては、各専攻の特徴をもった展開がなされており、特に工学専攻では演習を4割程度取り入れるなど、単に講義だけではなく学生自らが行動し成果を手に入れるという姿勢を感じました。

委員 C：教育課程方針は学位授与方針と整合性がとれており、教育課程の編成・実施方針も定められている。

各専攻ともに特色ある教育を展開しており、体系化された授業を組んでいる。他大学や研究機関との連携も行われている。

学位論文、成績評価などの基準も学生に周知され、異議申し立ての仕組みもできている。

委員 D：学位授与方針と教育課程方針が整合性を持って明確に定められており、教育課程が体系的に編成されている。ただし、専攻によっては副専攻制度や付加価値型教育プログラムを活用する学生が少ないことが課題である。

## 【基準6】学習成果について

教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっているか。

卒業（修了）後の進路状況等から判断して、学習成果が上がっているか。

委員 A：専門教育については学習成果が上がっていると評価できる。しかし、語学に関しては必ずしも学習成果が上がっていないのではないかと。多くの大学にも共通するが、センター



試験レベルを維持できない上に実会話・コミュニケーション能力を習得せず修了する者が大半なのではないかと思われる。

また学生の評価項目のうち「地域社会が直面する問題を理解する能力」「リーダーシップの能力」「グローバルな問題の理解」「国民が直面する問題を理解する能力」は、どの専攻でも軒並み不満足なレベルにある。こうした点を念頭に置いた教育を行っているのだとすれば、その手法を大幅に改善すべき状況にあると言える。一方で、こうしたことは個々人自らが学ぶべきであるとするならば、これを大学の「学習成果」として位置づけるのは適切ではない、といえる。何れにせよ、これらの項目を今後も残していくのであれば、それなりの対応を求めたいところである。多くの学生がこうしたことに関心を持たなくなることは憂慮すべきことであり、貴学学生が少しでも高い意識を得て修了していく方策を考えて頂きたい。

委員 B：成績から判断すると、十分期待通りの学習成果を上げられていると思われました。

現在、注目を浴びている情報学専攻においては、教育成果が手ごたえを感じているものと読み取れます。

一方で、アンケート結果から推察するに、学生、就職先ともに国際感覚や英語力を向上させたい、してもらいたいといった期待が高いと思われまます。

プレゼン能力やコミュニケーション能力は、想像以上に高いことがわかりました。

委員 C：学生のほとんどが標準修業年数で修了しており、就職率も高く、就職企業のアンケートでも採用に対する満足度は高いことから、学習成果は概ね上がっているものと判断される。

ただし、研究科の目的に「国際的な場面で活躍できる理工系人材の育成」を掲げていることを鑑みると、学生及び企業アンケート結果で外国語能力、国際的視野のポイントが共通して低いことは大きな課題であると考えます。今後、改善が必要である。

委員 D：単位取得状況、標準年限での修了等、良好と言える。また、各専攻とも学習到達度が高く、企業の求める職業能力を身に付けた結果、高い就職内定率を維持している。グローバル化の流れの中で、国際的視野や外国語の能力が今まで以上に求められるようになっていたため、今後はそれらに対応する教育プログラムの開発を期待したい。

### 【基準 7】施設・設備及び学生支援について

**教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されているか。学生への履修指導が適切に行われているか。また、学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われているか。**

委員 A：基準を満たしていると判断。

委員 B：学生に対する生活支援は、適正になされていると判断いたしました。

特に、経済面での支援についてもしっかりとフォローされていると感じております。

施設に関しては、設備そのものの機能と運用の二つの側面を見た場合、設備は予算などもあり 100 点は難しいと思われまますが、それを運用でカバーしようとしているものと思われまます。

就職支援については、学生の自主性により支援の受け方が変化してしまいまます。貴重な人

|   |
|---|
| 材ですので、できる限り高いレベルでの活躍ができるように支援をお願いするとともに、大学側が自ら企業などに情報発信する姿勢も必要かと思われます。  |
| 委員 C：学生のニーズや教育内容の変化に伴い、施設・設備の整備については要望が多いものと思われるが、整備には多額の経費を要するため、学生アンケートなどを参考にしながら、優先順位を付けるなどして、引き続き計画的に整備を進める必要がある。学生への相談、支援等については、概ね適切に行われている。 |
| 委員 D：施設・設備に関しては概ね良好であるが、専攻による整備状況の差がみられる。今後改築などの機会を活用し、バリアフリーや自主的学習スペースの拡充など一層の充実を図ってほしい。また、経済状況の困難な学生への経済的支援策の拡充をより一層期待したい。                      |

### 【基準 8】内部質保証システムについて

**教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。**

**教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、教育の質の改善・向上を図るための取組が適切に行われ、機能しているか。**

|   |
|---|
| 委員 A：教育スキルの向上が強く求められている中、教員が他教員の授業を見て学ぶ機会を増やそうとしていることを評価する。学生による授業評価も功を奏していると判断できる。総じて、教育の状況について点検・評価し、教育の質の改善・向上を図るための体制ができつつあること、教育の質の改善・向上を図るための取組が行われつつあると評価する。 |
| 委員 B：各専攻ともに、内部・外部からの意見を求めて、現状の把握に努めておりました。また、教員などへの研修も実施されていることが確認できました。  |
| 委員 C：内部質保証規則に基づき、委員会が設置され、評価・点検・改善活動が行われている。教員等の研修や講演会も実施され、教員等の資質向上に努めている。   |
| 委員 D：各専攻とも、教育活動の質の向上を図るための研修や取組が適正に行われている。  |

### 【基準 9】財務基盤及び管理運営について

**管理運営体制及び事務組織が適切に整備され、機能しているか。**

**教員と事務職員等との役割分担が適切であり、これらの者の間の連携体制が確保され、能力を向上させる取組が実施されているか。**

|   |
|---|
| 委員 A：基準を満たしていると判断。  |
| 委員 B：管理体制や事務組織は整備されていると感じておりますが、運用面においては改善の余地があるとの意見も散見されたため、今後は、運用面における改善を促していただきたい。ただ、これまでの教員像から、新たな時代の教員像への転換を目論んでいることも感じており、期待しております。 |
| 委員 C：管理運営のための組織が整備されており、人員不足を感じつつも、効率的な運営管理を心掛けている。学外の有識者の意見も取り入れるなどの取組みも行われている。  |
| 委員 D：管理運営体制と事務組織は適切に整備され、機能していると判断できる。ただし、浜   |

松キャンパスにおいては、事務再編により事務体制が改善されたものの、学生定員増への対応などに課題があるため、大学事務のより一層の充実が望まれる。

### 【基準 10】教育情報等の公表について

研究科の教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされているか。

委員 A：教育研究活動等についての情報が、適切に公表されている。

委員 B：適正な内容が適切なタイミングで Web を用いて公表されていることが確認できました。

委員 C：メディアや Web ページを通じて情報発信に努めている。

委員 D：各専攻共にウェブページや複数のメディアを通じて、教育研究活動の情報が適切に公表されている。

### 【基準 11】研究活動の状況及び成果について

研究科の目的に照らして、研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能しているか。

研究科の目的に照らして、研究活動が活発に行われており、研究の成果が上がっているか。

委員 A：どの専攻も積極的な外部資金獲得、とりわけ生命線となる科学研究費助成事業（科研費）の取得を大部分の教員が目指し、実際さまざまなランクの科研費を獲得している。また、科研費獲得向上のための活動にも取り組んでいる。貴学で伝統のある工学専攻では、民間企業との共同研究ならびにその資金獲得が極めて活発に行われており、この点は特に高く評価したい。論文等の紙上発表も活発である。おしなべて、研究資金獲得から成果発表まで優れた成果を挙げていると評価して良い。

委員 B：他研究機関などとの比較がなされていないため、相対的には評価はできないが、論文発表、学会などで十分な活躍ができていると思われまます。  
また、研究補助金の獲得も毎年一定の規模を確保していることから、研究のテーマに対して期待がなされており、かつ、補助金が継続されていることから研究成果も上げられていると推察されます。このような成果に対して、地域への発信をさらに行っていただくことで、科研費の増加なども期待できるのではないかと考えられます。

委員 C：プロジェクト研究をはじめ、研究活動も活発であり、成果も出ているものと思われる。競争的研究資金も積極的に応募、活用している。  
著しい研究成果がみられた場合は、マスコミ発表するなど、積極的に情報発信に努めることが必要である。

委員 D：各専攻共に研究業績を表す各指標の数値、学術受賞数、招待講演数、記事・報道数などから、高い水準で研究活動が行われていることがわかる。特に、工学専攻における研究成果については「世界的水準にある」とされる分野が複数あるなど優れた実績を上げている。今後も研究活動のより一層の充実を期待したい。

**【基準 1 2】地域貢献活動の状況について**

**本学及び研究科の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げているか。**

委員 A：大学開放事業、地域産業振興のための多様な共同研究開発、サイエンスカフェ、IT 教育支援、スーパーサイエンスハイスクールとの連携など、多彩な活動を行っている。おしなべてこうした活動を高く評価したい。

委員 B：地域貢献活動は適切に行われているものと思われます。特に、小学生から中、高校生までを対象にしたイベントなどは総合科学技術研究科の将来の学生予備軍を育成する上でも必要な活動かと思われますし、そのような活動に学生が積極的に参加することは大きな意義があると思われます。  
ただ、せっかくの貢献活動も広報が上手に機能しているのか、点検をお願いしたいと思います。

委員 C：市民解放講座、高校等の出前講座、小中学生の体験学習などの活動は積極的に行われている。  
今後も地域に開かれた大学として継続的な活動を期待したい。

委員 D：地域社会・産業への貢献という観点から、各専攻共に積極的な地域貢献活動が行われ、成果を上げている。特に貴研究科は、静岡県及び愛知県東部地域在住の理科系高校生の地元進学先高等教育機関として、その役割が期待されている。今後とも積極的に高大連携に取り組み、高校生の理工系学問に対する動機付けに寄与していただきたい。

**【基準 1 3】国際化の状況について**

**研究科の目的に照らして、教育の国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げているか。**

委員 A：外国人教員の採用、留学生受け入れ、短期留学制度、教員の長期在外研究、国際共同研究等、教育の国際化の取り組みがなされていると判断できる。しかし学生側から見た大学の国際化には（学生自身の意欲も含め）まだ課題が多く残されているようである。

委員 B：各専攻ともに国際化を進める必要性を認めていることを確認できました。従い、各専攻において国際化を進めるべく、いくつかの施策も展開しており、学生もそれに応えるべく積極的に参加していることから、成果は着実に上がっているものと思われます。  
各専攻において、海外大学との交換留学、海外留学経験のある教員の採用、授業やレポートの英語化など進めており、是非、このような取り組みを静岡大学の“売り”にさせていただけたらと思います。海外からの留学生が地域にあふれる街づくりなど新しいコンセプトも地域貢献になるかと思いました。

委員 C：一定数の外国人学生を受け入れるなど受入体制は整備されているものと思われる。  
しかしながら、基準 6 で示した通り、学生及び企業アンケート結果からは国際化に向けた活動が成果を上げているとは見受けられないことから、引き続き改善を進めてほしい。

委員 D：教育の国際化、留学生の受け入れ、学生の国際交流等、教育の国際化に向けた活動が適切に行われている。しかし、日本人学生の国際化に関してはまだまだ課題があると言わざるを得ない。大学の中期目標に「国際感覚と高い専門性を有し、チャレンジ精神にあふれ、豊かな人間性を有する教養人を育成する」とあることから、今後、国際化推進のための教育プログラム等の開発、充実を期待したい。

## 総合評価（全体を通してのコメントをお願い致します）

委員 A：平成 26 年度まで縦割りだった 4 つの研究科を統合的に運営することにより、修士課程の大学院学生にとってこれまでになかった横断的な学びの場が提供されていることを高く評価したい。教育のみならず、理学、農学、工学、情報による複合的かつ学際的な研究環境の醸成は、これからの新たな学術領域を生み出す可能性もあり、大いに期待したい。静岡キャンパスと浜松キャンパスに跨がっていることから十分機能していない部分もあることが伺えたが、従来の枠を取り外した教育ならびに研究の実践は極めて重要である。以下個別の意見を記したい。

- 1) 研究資金についてはどの専攻も積極的な外部資金獲得、とりわけ生命線ともなる科学研究費の獲得を大部分の教員が目指し、実際さまざまなランクの科研費を獲得していることを評価する。
- 2) 教育スキルの向上が強く求められている中、専攻によっては教員が他教員の授業を見て学ぶ機会を増やそうとしていることを評価する。学生による授業評価は、教員が自ら教育手法を改善していこうとする意欲を与えており評価に値するが、良い授業を行っている教員の手法を更に積極的に取り入れて行くための組織的な取り組みを期待したい。
- 3) 留学生を積極的に受け入れるアジアブリッジプログラム、海外での研修プログラムなどを充実させようとしていることを評価する。とかく内向きになりがちな今般の学生をいっそう刺激する方法を考えて頂きたい。
- 4) 地域とのつながりを強化する様々な試みや工学専攻を中心とし活発な産学官連携活動を高く評価する。フォトニクス企業を初めとする多数の企業との連携、地域防災、山岳科学など、静岡県内の大学ならでは活動である。
- 5) どの専攻にも共通して、国際性、語学能力、リーダーシップが培われたか否かの問いに対して大半が不満足である、と学生や受け入れ企業が答えている点については重く受け止め、これを改革すべきである。国際性や語学は留学生を増やしても改善されるわけではなく徹底的な訓練なくしては身につかない。教員自らの国際性や語学力も問われるが、卒業までに身につけておきたいこうした基本については学部を含めたカリキュラムを見直すべきである。またリーダーシップを身につけさせることについては、日常の中で醸成される部分や個々の学生のパーソナリティーに依るところも大きいですが、総じて意識的な訓練も極めて必要である。国際性、語学能力、リーダーシップはどの大学でも程度の差こそあれ重要な課題として認識されていることから、是非、貴学がその先頭に立って頂きたい。

委員 B：総合科学技術研究科として 4 年が経過し、各専攻科の横比較ができる体制となったことにより、確実に教育の質や学生のレベルなど上がっていると感じました。

各種規程などもしっかり整備されており、コンプライアンスの観点や多様性への対応など、新しい時代への対応もなされていることも感じました。

一方、地域の企業からの視点では、地域企業と総合科学技術研究科の接点が少ないことも改めて感じた次第です。例えば就職活動の際に、経験が少ない学生たちに、十分な情報量と質があたえられているのか、企業側も改善すべき点があるように感じております。今後、企業側が求めるスキルや人物像はゼネラリスト、専門的な研究者、国際化など多彩

になっており、企業のニーズをうまくとらえていただければと思います。

今後の総合科学技術研究科の活躍に期待いたします。

委員 C：それぞれの専攻では創意工夫をしながら、教育、研究等に取り組んでいることが伺えた。

ただし、統合のメリットを教育、研究面でもっと発揮できないものかと感じた。具体的には、農業分野では、現在、農業、工業、情報分野が連携して、「スマート農業」の研究が進んでいる。本県の生産現場でも最近積極的に導入が進んでいる。農業を例にとっても、各専攻が連携することにより、大きな研究成果につながるテーマがあるのではないかと思われる。

各専攻の連携による共同研究やプロジェクトなどにチャレンジし、新産業の創出や人材育成などにつなげてほしい。

委員 D：全体を通して、貴研究科が平成27年度の大学院改組を経て、研究科や専攻の枠を超えた、分野横断的な教育プログラムを提供する大学院として進化していることが理解できた。将来的に、法人の統合が予定されているが、今まで貴研究科が地域社会や産業に果たしてきた役割が損なわれることなく、「社会から期待される研究科」であり続けることを期待したい。

また、静岡県内の高校生にとって、貴学は「進学したい大学」である。今後も、より一層の特色化、魅力化を図り、優秀な人材を養成する高等教育機関としての役割を果たしていただきたいと切望する。

## VI あとがき

6月3日に開催された外部評価委員会では、静岡大学大学院総合科学技術研究科の教育研究活動につきまして、平成25年度から29年度の5年間を中心に、学外の有識者の方々から評価をしていただきました。総合科学技術研究科評価実施委員会では、外部評価のための基礎資料となる自己評価報告書を、昨年度から今年度にかけて作成し、諸々のデータや資料の収集・整理と分析を行いました。外部評価委員会当日にいただきました、外部評価委員の方々からのご意見ならびに、後日送られた外部評価結果調査票におきまして、自己評価書の各項目に対して、評価できる点と改善すべき点も含めて、多くの励ましのお言葉を頂き、評価実施委員会一同、作成の苦労を思いながら、今後につながるご意見を頂いたことが大きな喜びです。

特に、これまで縦割りだった4つの研究科を統合的に運営することで、横断的な学びの場が提供され、教育のみならず、学際的な研究環境の醸成に高い評価を頂いたことは、本研究科の目的が、手探りながらも達成されつつあるという、大きな励みとなりました。また、ABPなどの海外とのつながりを深める活動への評価や、多数の企業との連携、地域防災、山岳科学など、静岡県内の大学ならではの活動に対する評価など、専攻横断的な取り組みを意識した教育が成功していること、さらにそれらの取り組みの結果、社会に期待される人材が供給されているという評価は、今後につながるものです。一方、国際化の取り組みは評価できるものの、国際性、語学能力、リーダーシップが培われたか否かの問いに対しては、学生、受け入れ企業ともに満足ではないというご指摘は、本学の問題点として、今後改善する必要があると痛感しているところです。今後は、英語教育の充実のみならず、リーダーシップを発揮できるパーソナリティーを育てる人材育成に一層励みたいと思います。

外部評価委員会の開催にあたり、数多くの方々にお世話になりました。特に、外部評価委員の皆様におかれましては、ご多忙中にもかかわらず、大部の自己評価報告書を事前に目を通していただき、委員会席上でのご議論および後日お寄せいただいた外部評価結果調査票により、数多くの貴重なご意見、ご指摘を賜りました。また総合科学技術研究科ならびに関連組織の教職員の皆様には、自己評価書作成のための資料・データの提供や収集など種々ご協力をいただきました。この場を借りて皆様に感謝申し上げます。

令和元年7月

静岡大学大学院総合科学技術研究科

平成30年度評価実施委員長

金原 和秀

## 2019年度 静岡大学総合科学技術研究科 外部評価委員会

2019年6月3日 (月)

静岡大学総合科学技術研究科長 近藤 真

SHIZUOKA UNIVERSITY

1. 総合科学技術研究科について
2. 情報学専攻
3. 理学専攻
4. 工学専攻
5. 農学専攻

SHIZUOKA UNIVERSITY

2

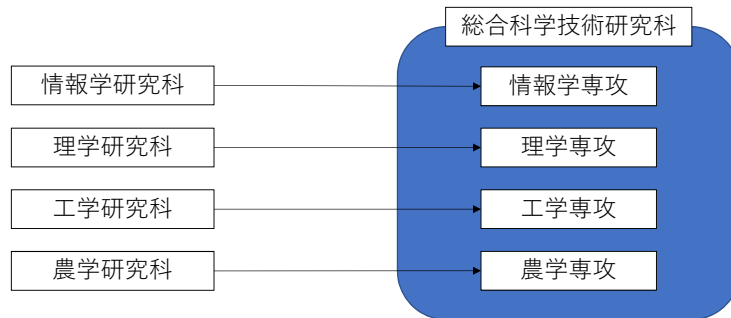


## 総合科学技術研究科について

### • 研究科の構成 (p.1)

2014年度以前

2015年度以降



## 総合科学技術研究科について

### 【基準1】

- ✓ 研究科の目的 研究科規則第2条 (p.2)
- ✓ 育成する人材像 中期計画・中期目標 (p.2)
- ✓ 3ポリシーの制定 (p.3)
- ✓ 大学教育法第99条に合致 (p.3)

## 情報学専攻 教育内容とその成果【基準5, 6】

- 理工系情報学から文系情報学までを含む幅広い教育プログラム  
情報科学、情報システム、情報社会デザイン (p.30)
- 社会人再教育への対応  
社会人再教育のための特別プログラム (社会人リフレッシュ教育特別コース) (pp.30-32)
- 副専攻、他研究科・他専攻科目の履修 (pp.32-33)
- インターンシップ、海外インターンシップ (p.34)
- 「ITスペシャリスト」認定 (pp.36-37)

## 情報学専攻 教育内容とその成果【基準5, 6】

- 単位取得状況 (p.48)  
1年次終了時点で、2年次必修科目を除く修了要件をほぼ満たしている
- 修了状況 (p.48)  
標準修了年限 (2年) 内修了率 90%以上
- 修士学生の受賞・表彰 (pp.49-50)
- 学生アンケート (pp.51-53)  
達成度、満足度ともに70~80点 (100点満点換算)
- 就職状況 (pp.54-55)  
毎年度、100%近い就職内定率

## 情報学専攻 研究活動の成果【基準11】

- 研究プロジェクト支援 (Xプロジェクト) (pp.91-93)  
10年間で15件のプロジェクトを支援  
科研費基盤 (A)、(B)、JSTさきがけへの展開
- 情報学研究推進室の各種取組 (pp.93-96)  
科研費獲得支援、情報学研究交流会、客員教員
  
- 研究業績数の継続的な増加 (p.102)  
査読付き論文、査読なし論文、学会発表、etc.
- 優れた研究や取組 (pp.106-109)

## 情報学専攻 地域貢献【基準12】

- 地域連携推進室 (pp.110-115)  
  
IT教育支援ボランティア (小中学生への指導)  
IT講師補佐ボランティア (教師対象の講習会の補佐)  
公開講座「情報学アラカルト講座」  
浜松商工会議所Webページ作成連携事業  
アイデアソン、ハッカソン (静岡県、浜松市等と連携)
  
- ICT・AI研修会 (静岡県試験研究機関研究員対象)
- システムアーキテクト養成プログラム (HEPT)

## 情報学専攻 国際化【基準13】

- 「Professional Presentations in English」、「English Thesis Writing」(研究科共通科目)
- 「Discussion and Report in English on General Systems Theory」(専攻専門科目)
- 英語対応科目の拡大
- 留学生(正規生) 約10名/年
- 海外インターンシップ、SSSV

## 理学専攻の教育の基本方針

1. 高い専門知識と独創的な研究能力を持つ人材の育成を目指す。
  2. 特論、演習、特別研究の有機的な関連を重視し、複数の指導教員によるきめ細かい教育・研究の指導を行う。
  3. 基本原理を重視した教育、および複数の専攻にわたる共通授業によって、複眼的な視野を養い、個々の専門的問題の解決能力を高める教育を行う。
- これらの基本方針に則して、教育が行われている。
  - 数学、物理学、化学、生物科学、地球科学の5コース。
  - 研究科共通科目2~4単位、コース必修科目16単位、コース選択科目10~12単位の合計30単位以上が修了に必要。
  - コース必修科目には特別研究と演習が含まれていて、修士学生としての主体的な研究活動及び最先端の学術情報に関する議論を行う。
  - コース選択科目では他コース及び他専攻の講義を履修することも可能であり、学際的・横断的な研究が推奨されている。

## 理学専攻の教育の特徴

- 複数指導教員制  
副指導教員は主指導教員とは異なる観点からの研究指導と助言を適宜行っている。
- コースによっては1年次終盤に中間発表会を行うことで各学生の研究の進行状況を教員全員が把握・評価し、2年次学生に対して全教員が助言できる体制を作っている。
- 放射科学教育プログラム  
理学部附属放射科学教育研究推進センターを活用し、物理学、化学、生物科学、地球科学のコースを横断的に展開。
- 特色ある授業の例  
「先端機器分析科学I、II」 農学専攻と共同して研究科共通科目として開講。  
「創造科学技術入門セミナーII」「創造科学技術先端機器分析演習II」  
研究者志向の学生向け。博士課程進学への意欲向上を目指す。
- 静岡県立大学大学院および東海大学大学院と単位互換の協定を締結。
- 理学専攻、農学専攻と上記の2大学院が持ち回りで主催して連携集中講義を毎年2回開講。
- キャリア形成のための「理学部同窓会寄付講座」。理学部卒業生や理学研究科修了生による講演。

## 教育成果

図表6-2-②-2 理学専攻修了生の身についた能力及び就職先での業務(職務)遂行に重要な能力(%)

| アンケート質問事項      | 身についた能力 |          |        | 業務遂行に重要な能力 |        |
|----------------|---------|----------|--------|------------|--------|
|                | 修了生*1   | 企業・官公庁*2 | 学校関係*3 | 企業・官公庁*4   | 学校関係*5 |
| 専門分野に関する知識・技術  | 100     | 83.3     | 87.8   | 83.6       | 97.5   |
| 幅広い教養と基礎学力     | 75.0    | 91.7     | 85.4   | 94.3       | 97.5   |
| 市民としての見識       | 25.0    | 64.6     | 78.1   | 61.8       | 97.6   |
| 英語の能力          | 37.5    | 39.6     | 51.3   | 52.9       | 56.1   |
| 問題発見/分析/解決能力   | 87.5    | 81.2     | 82.9   | 97.2       | 100    |
| 文章読解・表現能力      | 87.5    | 87.5     | 85.4   | 91.5       | 100    |
| プレゼンテーション能力    | 87.5    | 77.1     | 80.5   | 86.1       | 87.9   |
| コミュニケーション能力    | 87.5    | 81.3     | 75.7   | 98.6       | 100    |
| 情報通信技術活用能力     | 50.0    | 58.3     | 73.2   | 68.3       | 92.7   |
| 国際的視野          | 50.0    | 37.5     | 58.6   | 59.3       | 75.7   |
| リーダーシップ        | 50.0    | 56.3     | 61.0   | 91.0       | 97.5   |
| チームワーク         | 62.5    | 93.8     | 75.7   | 97.2       | 100    |
| 高度な専門的知識と研究能力  | 62.5    | 70.8     | 80.5   | 67.5       | 92.7   |
| 専門的職業人に必要な高い能力 | 62.5    | 60.4     | 73.2   | 63.9       | 85.4   |

- 修了生の就職先  
(企業・官公庁、学校関係)  
へのアンケートの結果  
(平成30年10月実施)

赤枠の項目の到達度が特に高いと評価。就職先が求める業務遂行に重要な能力とほぼ合致。教育の基本方針に沿った教育の効果ができていると考えられる。

\*1)アンケート回答数8 平成25年・27年度理学研究科修了生。\*2)アンケート回答数48 過去5年間の理学研究科・理学専攻修了生。\*3)アンケート回答数41 出身研究科の分類なし。\*4)アンケート回答数207 出身研究科の分類なし。\*5)アンケート回答数41 出身研究科の分類なし。

## 教育の成果 (学生の進路)

図表6-2-①-1 修了生の進路選択

|        | 修了者 | 進学率  |       | 就職率  |       | 就職希望者就職率 |       |
|--------|-----|------|-------|------|-------|----------|-------|
|        |     | 進学者数 | 割合(%) | 就職者数 | 割合(%) | 就職希望者数   | 割合(%) |
| 平成29年度 | 76  | 8    | 10.5  | 63   | 82.9  | 63       | 100   |
| 平成28年度 | 74  | 5    | 6.8   | 64   | 86.4  | 66       | 96.0  |
| 平成27年度 | 69  | 3    | 4.3   | 63   | 91.3  | 66       | 95.4  |

進学率=進学者数/修了者数を示す。就職率=就職者数/修了者数を示す。  
就職希望者就職率=就職者数/就職希望者数を示す。

- 就職希望者就職率はほぼ100%。
- 博士課程進学率も少しずつ増加している。
- 3年間で55名が専修免許を取得。

## 研究活動の成果 (論文、受賞など)

図表11-2-①-1 研究成果の公表状況(件数)

| 区分          | 平成27年度 | 平成28年度 | 平成29年度 | 合計  |
|-------------|--------|--------|--------|-----|
| 研究論文(査読付)   | 170    | 142    | 143    | 455 |
| 研究論文(査読無)   | 12     | 14     | 21     | 47  |
| 著書等         | 23     | 17     | 8      | 48  |
| 国内学会発表・研究発表 | 333    | 338    | 312    | 983 |
| 国際学会発表・研究発表 | 72     | 102    | 84     | 258 |
| 受賞          | 3      | 4      | 10     | 17  |
| 特許申請(取得数)   | 2(0)   | 4(0)   | 1(0)   | 7   |
| 新聞・TV等での報道  | 82     | 63     | 49     | 194 |

平成27年度～平成29年度において

- 教員一人当たり平均7報の論文・著書・総説を執筆。15件の学会発表。
- 理学専攻の教員約2割である16人と1団体が学会賞や学術賞を受賞。
- 新聞・TV等での報道が194件。

## 研究活動の成果 (外部資金)

- 継続分も含めて  
毎年約7割の教員が何らかの  
科学研究費補助金を獲得。

図表11-2-②-2 科学研究費補助金の獲得状況

| 区分            | 平成27年度 |         | 平成28年度 |         | 平成29年度 |         | 合計 |         |
|---------------|--------|---------|--------|---------|--------|---------|----|---------|
|               | 件数     | 金額(千円)  | 件数     | 金額(千円)  | 件数     | 金額(千円)  | 件数 | 金額(千円)  |
| 基礎研究(S)       | 0      | 0       | 1      | 46,700  | 1      | 36,500  | 2  | 83,200  |
| 基礎研究(A)一般     | 0      | 0       | 0      | 0       | 0      | 0       | 0  | 0       |
| 基礎研究(A)海外     | 1      | 8,100   | 1      | 8,600   | 1      | 4,700   | 3  | 20,800  |
| 基礎研究(B)一般・特設  | 6      | 26,800  | 6      | 19,400  | 8      | 25,300  | 20 | 71,500  |
| 基礎研究(B)海外     | 2      | 7,600   | 2      | 5,600   | 2      | 4,100   | 6  | 17,300  |
| 基礎研究(C)       | 32     | 33,600  | 29     | 31,500  | 27     | 27,500  | 88 | 92,600  |
| 挑戦的萌芽研究       | 3      | 2,600   | 1      | 1,500   | 3      | 6,500   | 7  | 10,600  |
| 若手研究(A)       | 2      | 15,600  | 2      | 10,800  | 1      | 3,000   | 5  | 29,400  |
| 若手研究(B)       | 10     | 8,400   | 8      | 7,600   | 6      | 5,550   | 24 | 21,550  |
| 新学術領域(計画研究)新規 | 0      | 0       | 0      | 0       | 0      | 0       | 0  | 0       |
| 新学術領域(計画研究)継続 | 0      | 0       | 0      | 0       | 0      | 0       | 0  | 0       |
| 新学術領域(公費研究)   | 1      | 2,600   | 0      | 0       | 0      | 0       | 1  | 2,600   |
| 研究成果公開促進費     | 0      | 0       | 0      | 0       | 0      | 0       | 0  | 0       |
| 合計            | 57     | 105,300 | 50     | 131,100 | 50     | 113,150 | 15 | 349,550 |

※金額の単位は千円、期間経費は除く。

図表11-2-①-4 民間との共同研究、受託研究等(件数)

| 区分        | 平成27年度 |        | 平成28年度 |        | 平成29年度 |        | 合計  |         |
|-----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-----|---------|
|           | 件数     | 金額(千円) | 件数     | 金額(千円) | 件数     | 金額(千円) | 件数  | 金額(千円)  |
| 奨学寄附金     | 25     | 20,245 | 29     | 21,443 | 23     | 13,944 | 77  | 55,632  |
| 共同研究      | 6      | 8,392  | 5      | 6,875  | 6      | 11,940 | 17  | 27,207  |
| 受託研究・受託事業 | 13     | 34,365 | 14     | 36,972 | 16     | 67,875 | 43  | 139,212 |
| 合計        | 44     | 63,002 | 48     | 65,290 | 45     | 93,759 | 137 | 222,051 |

- 民間からの奨学寄附金、受託研究  
民間との共同研究が、基礎研究に  
主軸がある理学専攻においても  
比較的活発。

## 地域貢献

- 社会人の就学を支援するための科目等履修生制度、特別聴講生制度あり。
- 一般市民を対象とした「サイエンスカフェ in 静岡」  
毎年10回、講演者は理学専攻の教員が中心。  
参加者は中高生から社会人、高齢者まで幅広い年齢層。
- 静岡サイエンススクール (小中高生対象)  
サマープログラム、オータムプログラムの年2回。  
理学専攻の教員や大学院生が指導。  
→ 科学技術振興機構の委託事業「未来の科学者養成スクール」へ発展。
- 地元高校への出張授業が平成27年度～平成29年度で28件。
- SSH指定校からの要請を受け、理学専攻の教員が研究面をサポート。

## 教員組織の国際化

- 国際化に対応可能な組織体制  
外国人教員が3名在籍。  
日本人教員のうち、約半数にあたる37名の教員が1年以上の海外での教育・研究活動の経験あり。
- 国際学会参加や調査研究・共同研究実施のための教員の海外派遣が毎年平均70件以上。
- 平成25年度～平成30年度において外国人研究者を延べ70名共同研究のために招聘。
- 国際共著論文187編、国際共著発表190件（平成25年度～平成30年度）。
- 海外の8機関との部局間協定を締結（平成25年度～平成30年度）。

## 教育内容・方法の国際化

- 平成27年度秋よりABPが始まり、留学生が増加。

図表13-1-②-7 理学専攻への留学生入学人数（カッコは内数で非正規生）

|      | 平成25年度 | 平成26年度 | 平成27年度 | 平成28年度 | 平成29年度 | 平成30年度 |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 理学専攻 | 0      | 3(1)   | 10(1)  | 6(0)   | 7(2)   | 10(1)  |

非正規生: 研究生および短期留学生

- 平成27年度からほとんどの科目を英語対応科目としている。
- 留学生が日本語授業プログラムを受講できるように時間割を考慮。
- 留学生に対する支援  
静岡大学国際交流基金による奨学金  
ABP学生は入学検定料、入学金、1年目の授業料が免除。2年目も所定の成績要件を満たせば免除。
- 理学専攻学生を海外研究機関での研修に派遣  
毎年各コースから大学院生1名を選抜。  
マサチューセッツ工科大学、ハーバード大学、香港科学技術大学に派遣し、現地の学生や教員と交流を持たせる。



## 基準5:教育内容及び方法

### • 連携大学院

学外における高度な研究水準を保つ国立試験研究所や民間などの研究所の施設・設備や人的資源を活用して大学院教育を実施

- 宇宙航空開発機構 H25: 2名、H26: 3名、H27: 3名、H28: 3名、H29: 3名
- 静岡県試験研究機関
- 産業技術総合研究所

### • 副専攻制度

修了要件単位(30単位以上)以外に、副専攻を希望するコース又は専攻の対象科目の中から8単位以上修得した場合、申請により副専攻修了証が授与される

- 副専攻 H26: 7名、H27: 9名、H28: 6名、H29: 3名
- 副コース H28: 17名、H29: 11名

### • 産業イノベーション人材育成プログラム

工学専攻と情報学専攻の学生が選択可能。実際の「もの・こと」に触れながら、自ら主体的に課題解決にあたる経験を積むことで、専門分野の知識と他分野の知識を融合し、いかにそれらを現実の問題に応用するかを学ぶ。

- 平成30年度より開始。初年度12名の受講生

## 基準5:教育内容及び方法

### • 講義、演習等の授業形態の組み合わせ・バランス

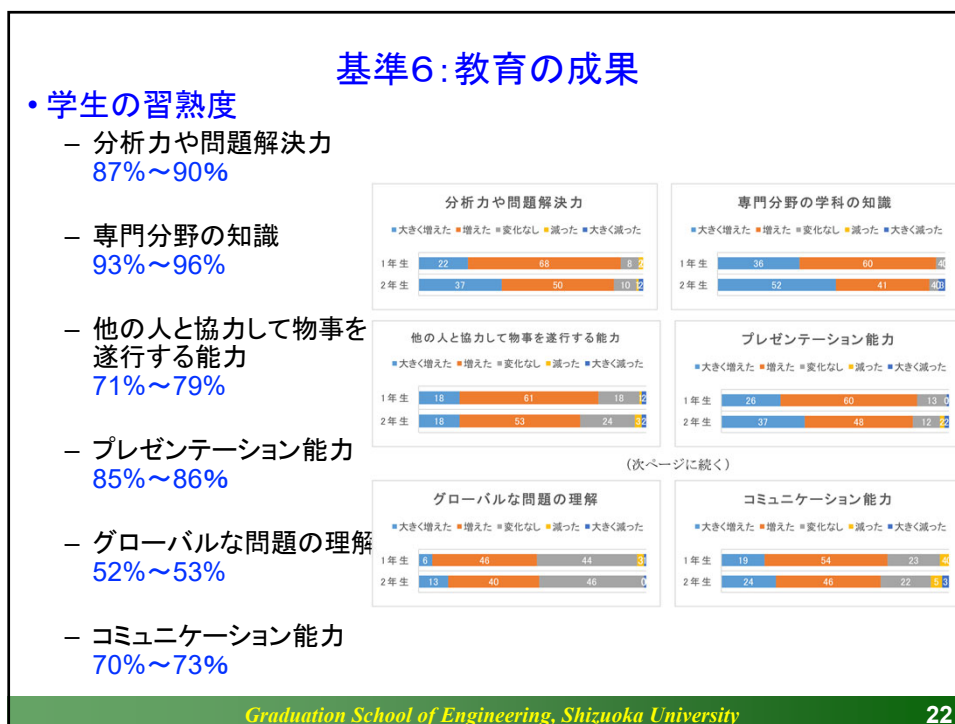
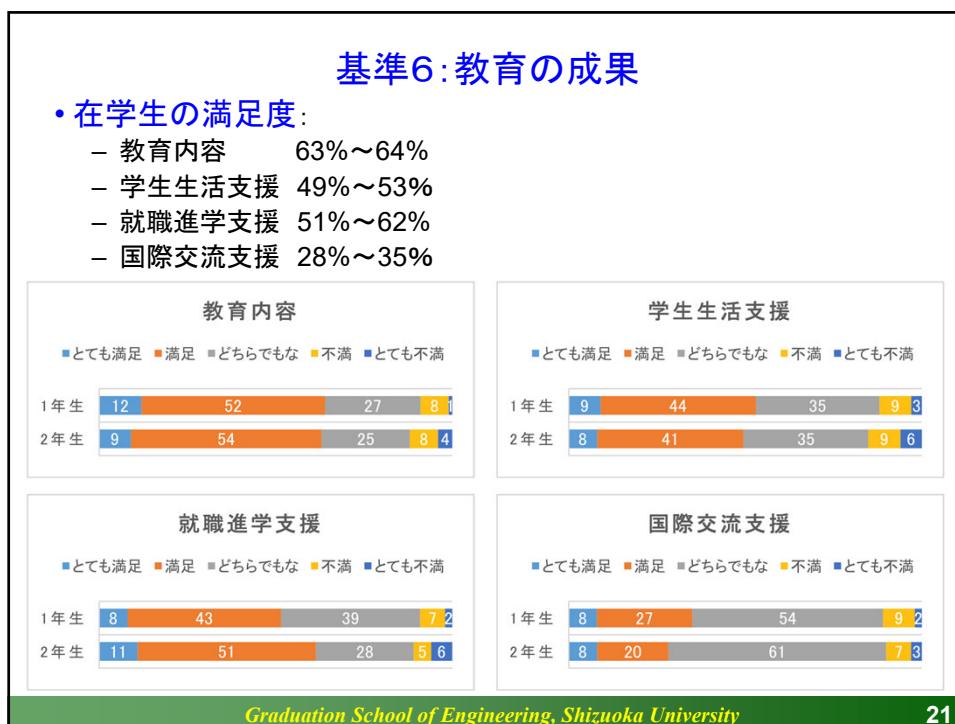
- 授業60%、演習13%、研究27%(機械、電気電子、電子物質、化学バイオ、数理システム)
- 授業60%、演習・研究40%(事業開発マネジメント、特定課題研究特論を実施)

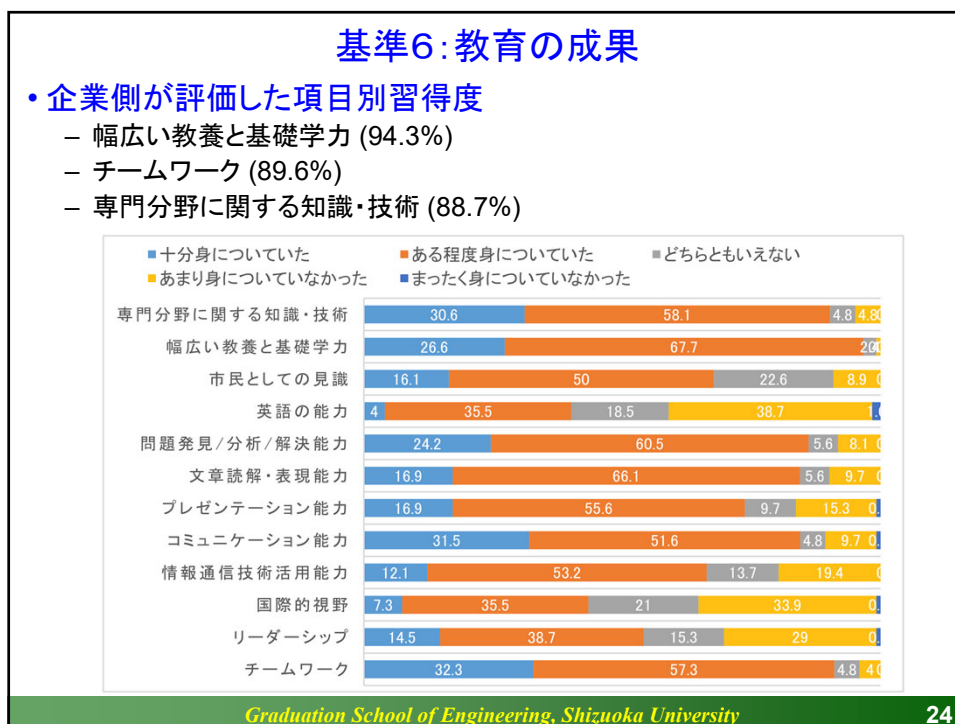
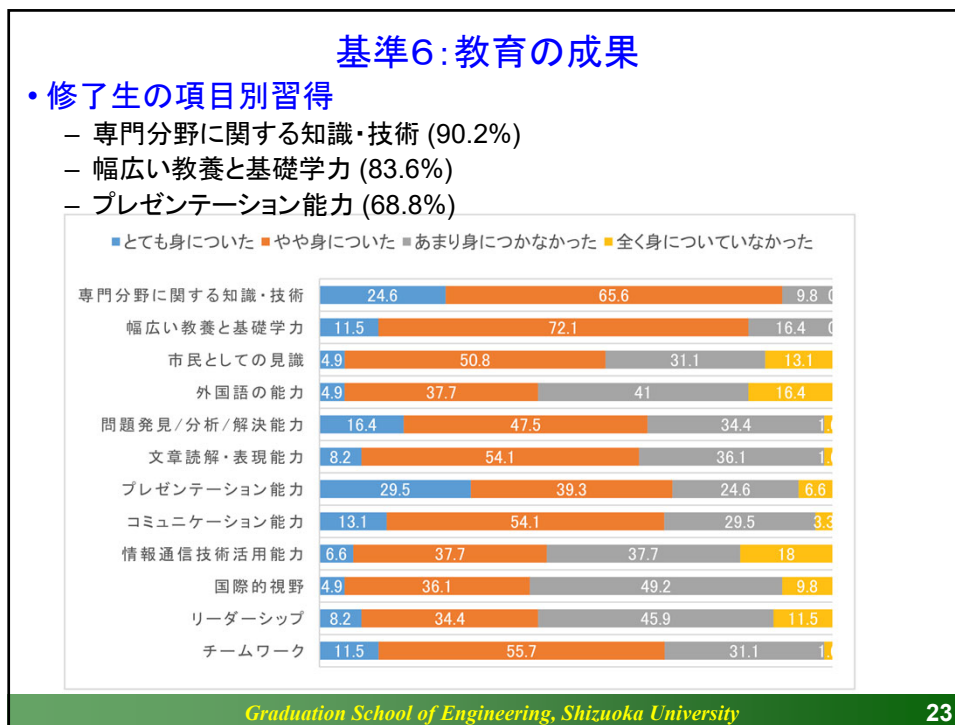
### • 研究を遂行する環境等

- 機器分析センター
- 情報基盤センター
- 浜松キャンパス共同利用機器センター、等

### • 事業開発マネジメントコースの取り組み

- ライブ配信による授業の実施(教員が外部にいる場合、学生が外部にいる場合に対応)
- 録画中継による配信(社会人への対応、復習用)
- 文部科学省「職業実践力育成プログラム(BP)」に指定
- 厚生労働省「職業訓練給付金制度」で認定





### 基準11:研究活動の状況及び成果

- 原著論文数

- 一人当たり年間 2.7報/人

|     | 平成 25 年度 | 平成 26 年度 | 平成 27 年度 | 平成 28 年度 | 平成 29 年度 |
|-----|----------|----------|----------|----------|----------|
| 英文誌 | 545      | 476      | 498      | 447      | 444      |
| 和文誌 | 77       | 92       | 83       | 43       | 49       |
| 合計  | 622      | 568      | 581      | 490      | 493      |

- 特許出願・取得状況

- 全国の大学の中で 20 位前後

|    | 平成 25 年度 | 平成 26 年度 | 平成 27 年度 | 平成 28 年度 | 平成 29 年度 |
|----|----------|----------|----------|----------|----------|
| 出願 | 76       | 100      | 55       | 55       | 47       |
| 登録 | 27       | 34       | 17       | 8        | 13       |

- 共同研究実施状況

|            | 平成 25 年度 | 平成 26 年度 | 平成 27 年度 | 平成 28 年度 | 平成 29 年 |
|------------|----------|----------|----------|----------|---------|
| 件数         | 218      | 307      | 249      | 253      | 262     |
| 金額<br>[千円] | 771,170  | 944,384  | 851,378  | 466,298  | 505,848 |

### 基準11:研究活動の状況及び成果

- 科学研究費補助金獲得状況

- 申請率はほぼ100%

|                | H26 |            | H27 |            | H28 |            | H29 |            | H30 |            |
|----------------|-----|------------|-----|------------|-----|------------|-----|------------|-----|------------|
|                | 件数  | 金額<br>(千円) | 件数  | 金額<br>(千円) | 件数  | 金額<br>(千円) | 件数  | 金額<br>(千円) | 件数  | 金額<br>(千円) |
| 特定領域研究         | 0   | 0          | 0   | 0          | 0   | 0          | 0   | 0          | 0   | 0          |
| 新学術領域          | 7   | 49,221     | 8   | 54,600     | 6   | 47,190     | 5   | 34,649     | 0   | 0          |
| 基盤研究 (S)       | 2   | 68,120     | 3   | 75,010     | 1   | 38,480     | 2   | 18,850     | 4   | 68,700     |
| 基盤研究 (A)       | 10  | 299,370    | 10  | 282,380    | 14  | 334,910    | 12  | 310,230    | 13  | 281,255    |
| 基盤研究 (B)       | 38  | 395,157    | 42  | 467,671    | 38  | 395,480    | 35  | 367,106    | 29  | 309,100    |
| 基盤研究 (C)       | 53  | 201,600    | 51  | 217,240    | 52  | 201,160    | 91  | 205,580    | 51  | 178,780    |
| 萌芽研究           | 20  | 64,227     | 16  | 51,623     | 23  | 75,463     | 17  | 72,060     | 11  | 84,857     |
| 挑戦的研究          |     |            |     |            |     |            |     |            |     |            |
| 若手研究 (A)       | 6   | 138,000    | 6   | 122,140    | 6   | 127,470    | 3   | 73,970     | 6   | 85,100     |
| 若手研究 (B)       | 17  | 60,850     | 16  | 57,130     | 13  | 45,710     | 12  | 43,330     | 9   | 32,760     |
| 特別推進研究         | 2   | 7,750      | 2   | 7,750      | 1   | 5,850      | 0   | 0          | 0   | 0          |
| 特別研究員<br>奨励費   | 6   | 10,320     | 3   | 6,160      | 0   | 0          | 1   | 1,700      | 0   | 0          |
| 研究活動<br>スタート支援 | 0   | 0          | 0   | 0          | 0   | 0          | 0   | 0          | 2   | 4,550      |
| 合計             | 161 | 1,294,615  | 157 | 1,341,704  | 154 | 1,271,713  | 178 | 1,127,475  | 125 | 1,045,102  |

### 基準12: 地域貢献活動の状況

- 「地域志向大学」宣言(平成 29 年 7 月 31 日)
  - 知(地)の拠点として、地域社会と学生・教職員が相互に啓発しあう
  - 学生が地域づくりの一員として地域課題の解決に向け連携・協働する取組
- 地域住民への教育サービス・学習機会の提供
  - 高等学校への出張授業および大学紹介
  - 高校生向けの実験実習講座を開催
- 「浜松ダビンチキッズプロジェクト」
- 大学開放事業
  - テクノフェスタイン浜松
  - オープンキャンパス、大学見学会
- イノベーション社会連携推進機構を窓口とした技術相談、共同研究、受託研究
- 「浜松 RAIN 房」プロジェクト
- 工学部ニュースレター「はまかぜ」、工学部メールマガジン

(2011 年 4 月創刊 4 回/年発行) 本報は、本学から地域社会へ発

27

### 基準13: 国際化の状況

- 外国人教員の採用  
H25-26に各コース1名の外国人教員を採用、現在11名の外国人教員
- 工学専攻の外国人留学生数

|        | 合計  | 内訳  |     |
|--------|-----|-----|-----|
|        |     | ABP | 私費  |
| H25 前期 | 1 3 | —   | 1 3 |
| H26 前期 | 1 2 | —   | 1 2 |
| H27 前期 | 1 6 | —   | 1 6 |
| H28 前期 | 4 6 | 2 5 | 2 1 |
| H29 前期 | 6 3 | 4 4 | 1 9 |
| H30 前期 | 5 2 | 3 8 | 1 4 |

- 留学生担当教員の配置(専任 2名)

### 基準13:国際化の状況

#### ・ SSSVによる学生の受け入れ及び海外派遣(独自基金による実

| 年度  | 派遣学生数 | 派遣研究室 | 派遣先大学機関名(国・地域) 派遣先 |  |   |
|-----|-------|-------|--------------------|--|---|
| H25 | 7     | 9     | 1                  | 釜山大(韓国)6名、台湾国立中央大(台湾)11名、チェコ科学アカデミー(チェコ)5名、カリフォルニア工科大学(アメリカ)5名、ジェンテラル スティルマン大学(インドネシア)8名、光云大学(韓国)6名、ガジャマダ大学(インドネシア)6名、国立台湾大学(台湾)15名、カルガリー大(オーストラリア)7名、ブトラ大(マレーシア)6名、トレド州立大(アメリカ)4名 |   |
| H26 | 8     | 8     | 1                  | 2  | 昌原大(韓国)14名、延世大(韓国)6名、ベトナム国家大ホーチミン校(ベトナム)5名、ブトラ大(マレーシア)5名、ウン・フセイン・シン・マレーシア大(マレーシア)6名、カセサート大(タイ)10名、南洋理工大(シンガポール)7名、スインバン大(オーストラリア)10名、ダルムシュタット工科大(ドイツ)11名、UCLA(アメリカ)5名、カリフォルニア工科大(アメリカ)4名、モントリオール大(カナダ)5名              |
| H27 | 7     | 4     | 1                  | 2  | 国立中央大(台湾)8名、台北科技大学(台湾)5名、マレーシア大(インドネシア)5名、西安交通大(中国)5名、ガジャマダ大(インドネシア)5名、モルドバ工科大(モルドバ)6名、南洋理工大(シンガポール)5名、チェコサイエンスアカデミー(チェコ)7名、カリフォルニア工科大学(米国)9名、UCLA(アメリカ)5名、モントリオール大(カナダ)5名、キエフ国立大(ウクライナ)9名                            |
| H28 | 8     | 5     | 1                  | 4  | 香港理工大(香港)5名、昌原大(韓国)11名、リガ工科大(ラトビア)7名、アムール州立大(ロシア)9名、スウィンバン大(オーストラリア)11名、上海交通大(中国)4名、台湾国立大(台湾)4名、ミュンヘン工科大(ドイツ)5名、淡江大(台湾)6名、ガジャマダ大(インドネシア)7名、マラヤ大(マレーシア)5名、香港大(香港)5名、カリフォルニア工科大(米国)3名、浙江大(中国)3名                         |
| H29 | 9     | 4     | 1                  | 4  | チェコ科学アカデミー(チェコ)5名、ボルドー第一大(フランス)4名、国立中央大(台湾)7名、南洋理工大(シンガポール)5名、ウィリニウス大(リトアニア)5名、モンクット王工科大(タイ)9名、カセサート大(タイ)5名、Vidyasirimodhi 工科大(タイ)5名、華中科技大(中国)5名、チュロンコン大(タイ)10名、ブトラマレーシア大(マレーシア)9名、台湾科学技術大(台湾)5名、UCLA(米国)5名、香港大(香港)6名 |

| 年度  | 受入学生数 | 受入研究室 | 派遣先大学機関名(国・地域) 受入れ元 |  |
|-----|-------|-------|---------------------|--|
| H25 | 2     | 1     | 4                   | マレーシア大(マレーシア)4名、Changwon 大学(韓国)5名、清華大学(中国)と慶北大学(韓国)7名、香港城市大学(香港)5名                       |
| H26 | 2     | 0     | 4                   | 台湾国立中央大(台湾)5名、ジェンテラルスディルマン大(インドネシア)5名、バンドン工科大(インドネシア)5名、スリ・ラマサミー・メモリアル大(インド)5名           |
| H27 | 2     | 2     | 5                   | 台湾科技大(台湾)5名、カタルーニャポリテク大(スペイン)4名、マレーシアサイエンス大(マレーシア)3名、スリ・ラマサミー・メモリアル大(インド)5名、オンタリオ工科大(5名) |
| H28 | 2     | 4     | 5                   | SRM 大(インド)5名、マレーシア大(マレーシア)4名、西安工科大(中国)5名、国立中央大(台湾)5名、カタルニア工科大(スペイン)5名                    |
| H29 | 5     | 1     | 1                   | ピンガムトン大とノースイースタン大(米国)5名  |

Short Stay  
5~24名の学生を海外から受け入れ

Short Visit  
74~94名の学生を海外に派遣

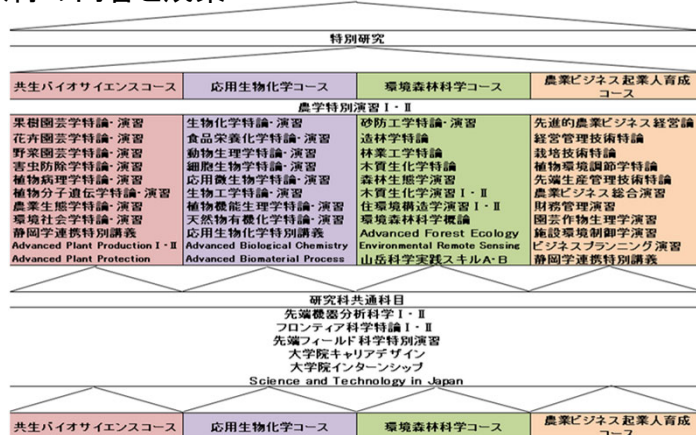
### 基準13:国際化の状況

#### ・ SSSVによる効果

- ・海外の人と英語でコミュニケーションをとることに対するハードルがかなり低くなり、積極的に意見交流しようという考え方に変わった。
- ・自分の英語の能力の低さを実感し、英語の能力の重要性及び英語の勉強の必要性を感じた。
- ・国や文化が違っていると、同じ問題に対してどう解決すべきなのかという考え方や方向性が異なるため、自分の考え方では気づけなかった多くのことに気づくことができた。
- ・生の英語に触れ、自分の勉強してきた受験英語があまり役に立たないことがわかった。
- ・自分の研究に関して、異なる視点でアドバイスをいただいた。
- ・十分な英語が使えなくても相手の言いたいことを聞き取ろうとしたり伝えようとする意識が強くなった。
- ・積極的に国際交流を取ろうと思うようになった。
- ・海外の学生の積極性に刺激を受けた。多くの日本人学生にとって非常に効果的だと思う。
- ・渡航先の国の文化やその人の考え方に対する理解が深まった。

- ・英語での会話に不安を感じる学生が12%程度減少
- ・英語での論文執筆に大きな不安を感じる学生も5%程度減少
- ・海外で働く意識については、ポジティブに考える学生が12%程度増

### 1. 教育の内容と成果



別表Ⅱ 修了に必要な単位数 (第11条、第16条関係)

農学専攻

| コース名           | 科目区分        |             |             | 合計     |
|----------------|-------------|-------------|-------------|--------|
|                | 研究科<br>共通科目 | コース<br>必修科目 | コース<br>選択科目 |        |
| 共生バイオサイエンスコース  | 4単位以上       | 12単位        | 14単位以上      | 30単位以上 |
| 応用生物化学コース      | 4単位以上       | 12単位        | 14単位以上      | 30単位以上 |
| 環境森林科学コース      | 4単位以上       | 12単位        | 14単位以上      | 30単位以上 |
| 農業ビジネス起業人育成コース | —           | 12単位        | 18単位以上      | 30単位以上 |

31

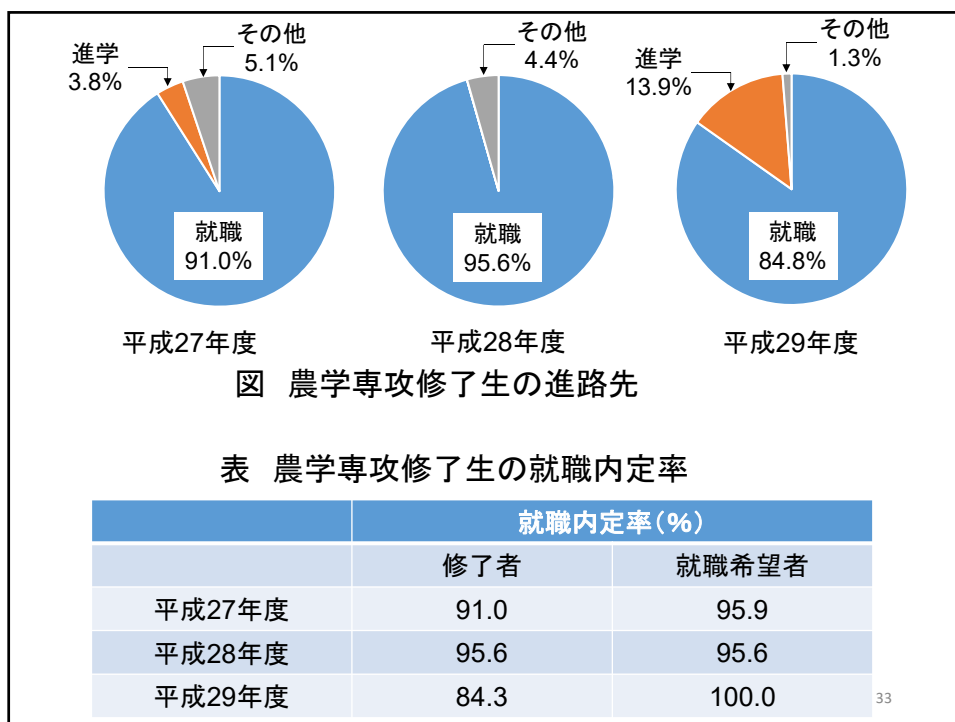
### 表 入学者の推移

| 農学専攻<br>(定員:87名) | 入学者    |        |        |        |
|------------------|--------|--------|--------|--------|
|                  | 平成27年度 | 平成28年度 | 平成29年度 | 平成30年度 |
| 4月入学             | 51     | 76     | 80     | 71     |
| 10月入学            | 10     | 6      | 11     | 12     |
| 合計               | 61     | 82     | 91     | 83     |
| 定員充足率<br>(%)     | 70     | 91     | 105    | 95     |

### 表 農学専攻における修了状況

| 入学年度   | 修了状況(%)        |                    |
|--------|----------------|--------------------|
|        | 標準修業年数<br>(2年) | 標準修業年数+1年<br>(計3年) |
| 平成25年度 | —              | 89.2               |
| 平成26年度 | 91.1           | 93.7               |
| 平成27年度 | 82.4           | 86.3               |
| 平成28年度 | 88.2           | —                  |

32



### 学生の多様なニーズ等に対応した授業科目等

- 静岡県立大学大学院、東海大学大学院、岐阜大学大学院との単位互換制度  
フロンティア科学特論Ⅰ、Ⅱ
- 連携大学院制度  
静岡県試験研究機関への大学院生の派遣

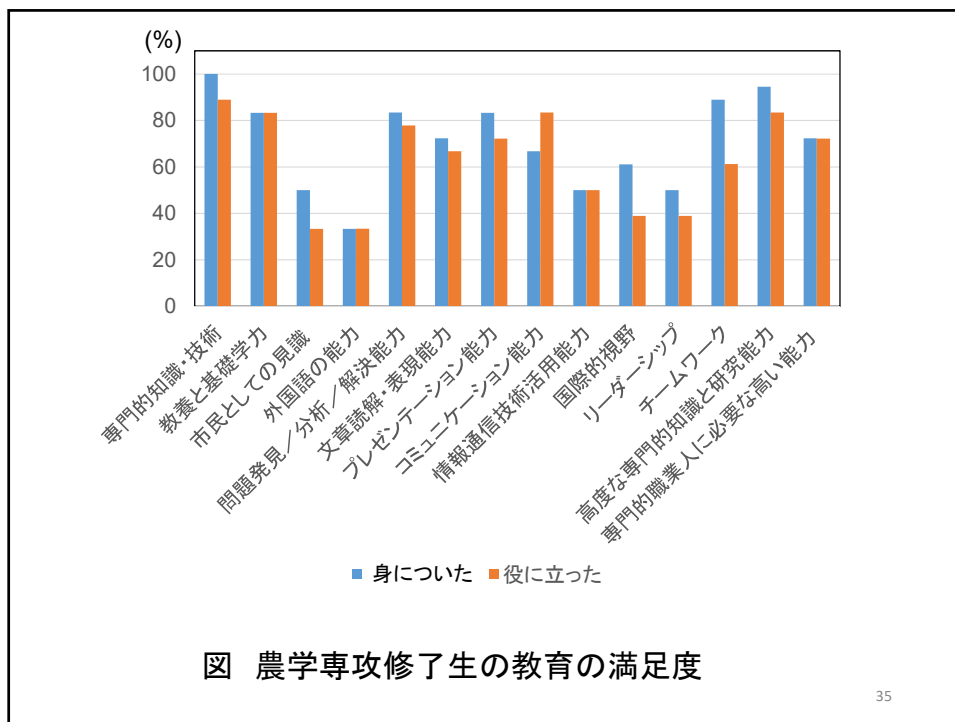
#### 山岳科学教育プログラム履修者数

(平成29年度よりプログラム履修開始)

| 年度     | 履修者人数 |
|--------|-------|
| 平成29年度 | 8名    |
| 平成30年度 | 2名    |

※ 筑波大、山梨大、信州大とのプログラム  
環境森林科学コースの学生が履修





35

## 2. 研究活動の成果

表 研究活動の実施状況

|      |    | 平成27年度 | 平成28年度 | 平成29年度 |
|------|----|--------|--------|--------|
| 原著論文 | 英文 | 111    | 91     | 102    |
|      | 和文 | 39     | 24     | 48     |
|      | 合計 | 150    | 115    | 150    |
| 学会発表 | 国内 | 275    | 285    | 306    |
|      | 国際 | 75     | 47     | 69     |
|      | 合計 | 350    | 332    | 375    |
| 著書   |    | 23     | 11     | 20     |
| 受賞   |    | 2      | 4      | 4      |
| 特許出願 |    | 10     | 6      | 11     |

36

表 科学研究費補助金の種目別採択件数及び補助金額

| 研究種目                     | 平成27年度 |    | 平成28年度  |    | 平成29年度                |    |
|--------------------------|--------|----|---------|----|-----------------------|----|
|                          | 件数     |    | 件数      |    | 件数                    |    |
|                          | 新規     | 継続 | 新規      | 継続 | 新規                    | 継続 |
| 基盤研究A                    |        |    | 2       |    |                       | 2  |
| 基盤研究B                    | 1      | 7  | 4       | 7  | 5                     | 7  |
| 基盤研究C                    | 6      | 7  | 4       | 10 | 3                     | 10 |
| 若手研究A                    |        |    | 1       |    | 1                     | 1  |
| 若手研究B                    | 2      | 4  | 2       | 7  | 1                     | 4  |
| 挑戦的研究(萌芽)                |        |    |         |    | 2                     |    |
| 挑戦的萌芽研究                  | 2      | 1  | 2       | 2  |                       | 2  |
| 研究活動スタート支援               | 5      | 3  | 8       | 6  |                       | 11 |
| 国際共同研究加速基金<br>(国際共同研究強化) |        |    |         |    | 1                     |    |
| 新学術領域研究<br>(研究領域提案型)     |        |    | 1       |    | 1                     | 1  |
| 合計(千円)                   | 88,270 |    | 163,300 |    | 175,917 <sup>37</sup> |    |

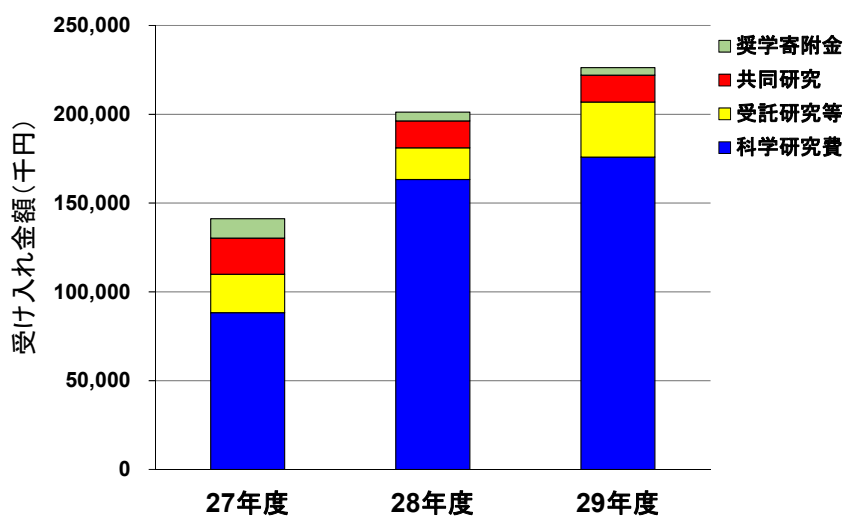


図 科研費及び外部資金獲得の総額

### 3. 地域貢献と国際化

表 地域フィールド科学教育研究センター各施設の利用件数

|             | 年度   | 平成27年度 |      |    | 平成28年度 |      |    | 平成29年度 |      |    |
|-------------|------|--------|------|----|--------|------|----|--------|------|----|
|             |      | 農      | 森    | 水  | 農      | 森    | 水  | 農      | 森    | 水  |
| 教育利用        | 利用日数 | 126    | 62   | 2  | 101    | 61   | 1  | 102    | 73   | 1  |
|             | 使用者数 | 3551   | 1487 | 27 | 2928   | 1352 | 29 | 4346   | 1325 | 28 |
| 研究利用        | 利用日数 | 48     |      |    | 67     |      |    | 196    |      |    |
|             | 使用者数 | 114    | 349  | 6  | 340    | 390  | 6  | 145    | 709  | 7  |
| 地域貢献<br>その他 | 利用日数 | 141    |      |    | 89     |      |    | 85     |      |    |
|             | 使用者数 | 4411   | 247  |    | 4365   | 254  |    | 3436   | 55   |    |

農・・・持続型農業生態系部門  
森・・・森林生態系部門  
水・・・水圏生態系部門

39

### 静岡県先進的農業推進協議会・平成29年度研究成果 情報交換会 開催要領

#### 1 主 旨

研究成果や最新技術、時事テーマ等、静岡大学と静岡県に共通する研究素材等について情報交換し、研究分野の連携強化に繋げるため研究成果情報交換会を開催する。

2 日 時 平成29年 11月 9日 (木) 13:00~16:40

3 会 場 AOI-PARC (沼津市西野317)  
東部総合庁舎 別館 2階婦人センター集会室 (沼津市高島本町1-3)

4 参集機関  
静岡大学、農林技術研究所、畜産技術研究所、農林事務所、  
県関係部局、関係団体等

#### 5 内 容

- (1) 開 会
- (2) あいさつ
- (3) AOI-PARC 施設見学
- (4) 研究成果等の発表①
- (5) 閉 会

40

表 外国人留学生受入数

|       | 平成27年度                     |  | 平成28年度  |  | 平成29年度                                    |   |
|-------|----------------------------|--|---|--|---|---|
|       | 前期                         | 後期   | 前期  | 後期   | 前期  | 後期  |
| 農学研究科 | 7                          | 3  | 2   | 1  | 0   | 0   |
|       | 中国 2<br>インドネシア 4<br>ベトナム 1 | 中国 2<br>インドネシア 1   | 中国 1<br>インドネシア 1                                  | インドネシア 1   |   |   |
| 農学専攻  | 1                          | 19   | 15  | 20   | 17  | 24  |
|       | インドネシア 1                   | 中国 1<br>韓国 1<br>インドネシア 10<br>タイ 5<br>バングラ<br>デシュ 1<br>ベトナム 1 | 中国 2<br>韓国 2<br>インドネシア 6<br>タイ 4<br>バングラ<br>デシュ 1 | 中国 2<br>韓国 1<br>インドネシア 11<br>タイ 4<br>バングラ<br>デシュ 1<br>ベトナム 1 | 中国 8<br>韓国 2<br>インド 1<br>インドネシア 3<br>タイ 3 | 中国 7<br>イギリス 1<br>インドネシア 13<br>タイ 1<br>フランス 1 |

41

表 過去2年間の農学専攻による国際交流支援

|              |  |
|--------------|--|
| ショートステイプログラム | 期間: 2016.12.1~2017.2.28<br>2017.3.1~2017.5.5<br>対象: 留学生4名受入<br>支援内容: 領域長裁量経費から768千円<br>(渡航費の補助、生活費補助ほか)                        |
|              | 期間: 2017.7.1~2017.9.1<br>2017.12.2~2018.3.30<br>2017.12.3~2018.3.31<br>対象: 留学生3名受入<br>支援内容: 領域長裁量経費から853千円<br>(渡航費の補助、生活費補助ほか) |

表 大学院特別研究派遣制度による派遣

|        | 人数 | コース        | 派遣先              |
|--------|----|------------|------------------|
| 平成27年度 | 1  | 共生バイオサイエンス | キンモンクット工科大学トンブリ校 |
|        | 1  | 環境森林科学     | 国立研究開発法人森林総合研究所  |
| 平成28年度 | 1  | 共生バイオサイエンス | キンモンクット工科大学トンブリ校 |
|        | 1  | 共生バイオサイエンス | 国立研究開発法人森林総合研究所  |
| 平成29年度 | 1  | 共生バイオサイエンス | キンモンクット工科大学トンブリ校 |
|        | 1  | 環境森林科学     | カセサート大学          |

42